

[01_1] 統計科学研究表紙会報等

<https://hdl.handle.net/2324/12708>

出版情報：統計科学研究. 1 (1), 1956-01. 統計科学研究会
バージョン：
権利関係：

談話室

統科研の運営について

A・U・生

統計科学研究会なる名称が、われわれの眼に入ってくるのは、毎年春・秋の数学会の際に出て来る立看板である。こゝで始めて「ああ、こういう会もあったっけ、そして私もその会員の一人であったっけ……」と記憶が甦えってくるのである。

この立看板だけは、日本数学会並みなのだが、さて研究会の内容はというと、大半の主な研究発表は、数学会の統計数学分科会に移って、かろうじて分科会の残党を集めて命脈を保っているようである。

その他に、英文雑誌「*Bulletin of Mathematical Statistics*」の発行が、統科研の主な仕事になっているが——これも最近では久しく姿を見せないでいるが、どうしたというのだろうか？——、この雑誌の内容も亦、会の名称に反して恐ろしく親しみにくい数学で、果して会員の中何人がこれを読んでいいのか疑問である。統科研が戦後再発足した当時は、研究発表会も当時の色とりどりの分野からの参加によって特色をもち、時には(数学会の)分科会と別個に、二日間に亘って会がもたれ

たこともあった。又当時発行していた邦文雑誌「統計数理研究」も、啓蒙的色彩を多分に盛り込んだもので、書店販売もあってかなりの売れ行きであったと聞く。それが今秋は *Biometric Society* との共催にもかかわらず、参加者は20名前後、発表論文に至っては僅かに6点にさびれてしまったのは、どうしてなのであるだろうか？

このように、統科研の運営を会員から無縁のものとしている理由は、枚々あるだろうが、先ずその筆頭に挙げられるものは、その構成員と運営の分裂症的傾向にあるのではないかと思う。統計科学研究会は、統計科学に因縁ある全研究者の数からすれば、会員数も多いとはお世辞にも言えないが、しかし一応社会科学系の人達や、会社や官庁の研究室に勤めている人達も含めて、統計科学に因縁ある殆どすべての分野の研究者によって、構成されているのである。しかるにその運営の現状をみると、その最も主要な仕事である、雑誌の発行や研究発表会は、前に書いたように、雑誌の内容も殆ど数学オンリーだし、研究会も開催の日程、場所、テーマ等々、あまりにも数学会の統計数学分科会に集る人達を中心に運営されているように思われる。

他方、統計に因縁ある人達の要望は、日科技連、日本規格協会その他の形をとつても結果し、品質管理、農業統計、

気象統計、生物統計等々、各分野での専門雑誌を生み出している。そして、統科研本来の目的と性格は、今やこれらのもので代りされ、空になるようにしていることにも、その大きな原因があるのではないかと想像される。

こうみてくると、今迄の統科研の行き方と、統計数学分科会の行き方と、一体何処が違っているのか？ もし違わないとすれば、日本数学会という权威に裏付けられているということだけからしても、当然分科会中心に移っていくことは、避け難いことではないか？ 又若し、統科研本来の目的に沿って、各層の要望を盛り込むとすれば、その様々な特色によって色づけられたものを、どのように処理していけばよいのか？ 又各分野で独立しつつある数理統計の適用と、どのように関連づけていくか？ という問題が起ってくる。この解答は、一体誰が与えてくれるのであろうか？

一部では、研究会の事務が九州にあることをも不振の原因であるという声もある。成程これもうがったような話であるが——そしてそれも一つの原因になっているのかも知れないが——しかし、当面している問題はそのような形式的なことで解決するようなことではないと思う。こゝらで、統計科学研究会も、その目的と性格を今一度十分反省し検討して、今後の方針をじつ

りと考えてみる機会ではなからうか。今度発行されるという邦文雑誌「統計科学研究」が、この点について全会員に問題を提起し、今後の我々の進むべき道をはっきりつかまえるのに役立つようにしたいものである。更に色々問題も多く、複雑な日本の統計学界に、今後の我が国における統計学の研究の方向やそのための機構等について、少しでも討論を巻き起すきっかけになるよう望むのは、私の甘い希望であらうか……？

何がこの混乱をおこすのか？!

秋 山 健 一

このたび統計科学研究会から和文雑誌が発行されるので、思いつくまゝでよいから何か書くようにとの、編集部からの求めである。筆をとるにはとつてみたが、簡単に「思いつくまゝ」といつても、これはなかなかそんなに生易しいことではないのである。

一体この突如として出現する新雑誌に対して、私は何を期待すればよいのだろうか？ 私がもしも数学者で、「*Annals of Mathematical Statistics*」を愛読し、Wald や Lehmann の垂流をもって自ら任じているとすれば、又もしも工場の実験家で、「品質管理」を予約購読し、JISZ…を金科玉条として、日夜管理図と睨めっこしてい

るならば、或いは又、「*Biometrika*」は書棚に積み、「*農林統計研究*」は熟読するといった、生物統計のファンであるとすれば、これらの雑誌と並んで、この「*統計科学研究*」に如何なる記事を求めるべきなのだろうか？ 私にはさっぱりわからないのである。

わからないことといえば、決してそれだけではない。日本の数理統計学は、その理論の最も抽象的・数学的なものから、津々浦々の現場への応用を含めて、アメリカからの輸入であるといわれている。実際わが国の数理統計学者も、応用家も、その研究や実務において、アメリカの雑誌に依存することは、誠に日常的現象である。彼等が学会などで久し振りに顔を合わせ、さて話題となるのは、「*A.M.S.*」の53年がどうしたとか、「*J.A.S.A.*」と「*A.S.Q.C.*」とがどうしたとか……。誤解しないで頂きたいが、こゝで私の言いたいののは、こんなにもアメリカについて語る人が多いのに、彼等めいめいのイメージはそれ程にも喰違わず、引用する雑誌も大体一致しているということだ。

ひるがえって私は空想する——そのバラ色の幻の中ではわが日本が、アメリカの代りに数理統計学の最先進国だったと仮定しよう。（そのように、日常の劣等感が優越感に逆転することは、心理学ではごくありきたりの現象である。）そうだとすれば、*American St-*

atistical Association の大会に集った統計学者のうち、A氏は恐らく輝かしき日本の「*Bulletin of Mathematical Statistics*」の読者であり、B氏は「*Annals of Institute of Statistical Mathematics*」の読者で、又C氏は「*Report of Statistical Application Research*」の読者であることだろう。彼等三人が顔を合わせて、さて共通の話題といえば、先進国日本では、研究資金が余程有り余っているらしく、色んな雑誌が出るということと、それらの関係も学界の事情もどうもよくわからないという、後進国らしい愚痴が殆どであるだろう。そこでA氏、B氏、C氏は日本に手紙を送って、それについて質問するかも知れない。もし私がA氏の手紙を受け取ったとしたら、私自身さっぱりわからないのだから困ってしまう。それに他にも誰一人としてわかっている人はいないような様子だし……。

これはほんのさゝやかな思考実験に過ぎないが、私は近頃折に触れてはこうした空想を繰返して、その度に妙に寒々とした気持になり、はつと我に返ってあたりを見廻すのである。

するとそこには何人かの同級生の姿が浮び上って来る。その一人Dは或る研究所にいる。Eは或る大学の助手をしている。Dは*N*統計学会には必ず出席し、Eは*S*学会には夜通し汽車に乗

ってでも出て行くフアイトの持主である。がEはN統計学会には今だかつて顔を見せたこともないし、DはS学会には出ないから、卒業以来顔を合わせたのは、某先生の告別式の時と、オイストラフが来た時だけだという。それでいて、二人とも全く同じようなことをやっているのである。Wald がどうした、Blackwell がこうした、Girshick は死んだとか何とか……。又お互いにめぐり合った所をみると、奇妙にもお互いに相手の研究所や大学の様子や、研究のありさまを非常に知りたがっているということがわかり、それでいてやはり、わずか四、五分の立話しをしたただけで、あわただしくわかれて行く、「東は東」といった光景を見せられるのであった。

ところでもう一人のFは、或る生産会社に就職し、管理図を書かされているが、卒業と同時に大学を離れてから、もう六・七年にもなるのだから、わからないことも多い。そこでDとEとに聞いてもさっぱり要領を得ないと彼はこぼすのである。「某博士と某々教授は、時々工場に来ると”手順1……“”手順2……“という工合に教え込む。そういうやり方は、案外好評だよ。俺はどうも安直過ぎると思うが、DやEのように、『あゝ実際問題か、それなら僕はわからん』という連中もどうかと思うね。あれでも統計学者かねえ

……。」

DもEも日本の数理統計の研究がまだまだ低く、狭いことを嘆くことでは決して人後に落ちない。「何しろ研究者の数が少く耗がしいので、悪いとは思いますが、実際問題などには構ってられないのだ」というのが彼等の共通の遁辞なのである。二人があまりにも似たようなことを言うので、二・三年前には、「DとEは唇でこっそり口裏を合せているのかな？」と邪推して、少しはひそかに喜んだことすらあるが、しかしどうもそうではないらしい。それにしては、彼等はお互いに相手の属する「学派」に対してあまりにも峻厳ではないか、感情的ではないか、と思ひ直して、私は大いに絶望した。

という私は実は彼等の仕事と同じ雑誌にのり、一冊買うだけで二人の論文が読める日を、心から待望しているのである——勿論私の経済的な理由からも……。この間そのことをFに話したとき、世間ずれしたFはニヤニヤ笑いながらこう言った。「系列化という言葉を知っているか？ どちらかが徹底的に敗北し、屈服し、従属するのでなければ、競争会社が合併することは先ずないね。それも資本や政治力で勝負がつくのだ。決して製品の質なんてもじやない……。」と。

新らしい雑誌を手にとつて、Dは、Eは、そしてFは何と言うだろうか？